

fate/paradox zero

琳鈴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火刑に処されるジャンヌ・ダルクが死の間際に見たのは、燃える冬木の街と、消え行く2つの命。『あの二人を助けたい』ジャンヌの思いを受けたごく普通の女子高生、鈴代唯が振じ曲がった聖杯戦争に身を投じていく…。

目次

プロローグ	1
設定	5
一話	12

プロローグ

ほんの少し前まではフランスを勝利に導いた救国の聖女……と、呼ばれていた。

【この魔女が！】

【汚らわしい！】

【早く魔女に死を】

死ね！死ね！死ね……

火刑に処された聖女は、何を思ったのだろうか？　ただ、彼女は天を仰いだ。怒りも無い。憎しみも無い。後悔も無い。苦しみも無い。

地獄の様な責め苦を受けていた時ですら、心の内で神に祈りを捧げていた程。

悲しみは……。その感情は、何故だか無視できない。足元に火が灯され、瞬く間に頭まで燃え広がっていく。熱く、息が出来ずに苦しいけれど、それでも聖女の瞳に曇りは無い。

少しずつ意識が薄れる。聖女の瞳から零れた透明の一滴が、その頬を濡らす。

私は、何も出来ないまま。

その刹那、聖女は火が燃え広がる景色を見た。白昼夢だろうか？建物が崩れ落ちた街で、一人の男が絶望に染まる瞳で町をさ迷う。

男は心が死んでいった。全てを失い、希望を消した男は救いを求めていたのかもしれない。その足元にある、小さな命にも気付かず、に町をさ迷った。その、僅かの時間を経たず、男は命を失った。

もしかしたら、足元の小さな命と出会えていれば、男の道が変わっていたかもしれない。2つの道が交われば、男の生涯は変わったのかもしれない。…それは、きつと誰にも分からない。

その一瞬の光景は、聖女の最期の心を作った。

『あの男性と、小さな命を救いたい。でも、私の命はもう消えるだろう。だから…誰か…』

頬を伝った涙は、燃え盛る炎に掻き消される。

聖女の思いは、そこで途切れた。

ある夏の夕暮れ、日本と呼ばれる東の島国 だった。高校二年の学校の帰り道、鈴代（すずしろ）唯（ゆい）は導かれる様に人の少ない公園に足を向けていた。

何故だか、何時もより夕陽を懐かしいと思ひ、自然と空を仰いだ。

ふと、頭に響く誰かの声に気付く。

誰？何の声？

『あの人を、助けて…』

…え？

「…誰を？」

思わず呟いた唯の心は、その言葉に込められた悲しさと苦しみを直に感じた。誰とも知れない声なのに、まるで自分の心の様で胸が締め付けられる。

ねえ私が、助けようか？ そうしたら…あなたは救われるのかな。

その思いを受け止めたのか、夕陽が一層光を放った。その光に包まれ、一瞬で消えていく少女の事など誰も気付く事は無かった。

心優しき少女は、いつ終わるとも知れぬ戦いの中に身を投じていく事となるのだった。

次に目覚めた少女の瞳に映った自分の姿は、金色の髪に青い瞳の聖なる乙女である事

は、まだ知らない。

.

設定

※オリ主、オリキャラ、オリサーヴァント有
なるべくネタバレは控えています。本編閲覧後に読む事をお奨めします。

◇ルーラー(善)

ジャンヌ・ダルク(憑依?)

鈴代(すずしろ)唯(ゆい)(17)

◇セイバー(善)

パーシヴァル

アーサー王伝説の騎士の一人

一人称「私」

↓マスター衛宮・切嗣(20代前半)

◇ランサー(善)

関羽

蜀漢の創始者である劉備の義兄弟。

一人称「私」

↓マスター昇（しょう）龍邦（りゆうほう）（20代半ば）

◇アーチャー（善）

那須与一

源平の戦いの功労者、弓の名手。

一人称「僕」

↓マスター藤村（ふじむら）観月（みつき）（16）

◇ライダー（混沌）

ナポレオンⅡボナパルト

革命期のフランスの軍人、政治家

一人称「余」

↓マスタールークⅡロクスロート（42）

◇キヤスター（悪）

グリム兄弟（長兄ヤーコプ、次兄ヴィルヘルム）

一人称「僕」

↓マスターユリアン（8）

◇アサシン（中立）

ユライノヤノシーク

スロバキアの盗賊

一人称「俺様」

↓マスター自称ルパン（？）

◇バーサーカー（悪）

エドワード黒太子

イングランドの王太子

一人称「私」

↓マスターリリーローズ（18）

【第2勢力】協会側

◇ルーラー

ラファエロサンティ

ルネサンスの三大巨匠の一人

一人称「私」

↓マスターコトミネ（20代？）

◇アリス（？）

↓マスターマキリ・ゾウケン

◇セイバー

アダム

↓マスター白狼

【第3勢力】

アインツベルン主体の神兵隊

魔術を使わない集団

主要人物

◇オーディン（20代?）

シルバ||バルトメロイ||シユバインオーグ

◇トール（20代）

玄霧（げんむ）卯月（うづき）

◇ロキ（15~19?）

←各サーヴァントの宝具、第3勢力の能力（ネタバレ有り）

・ジャンヌ

スキル『聖女？』

結界宝具『我が神はここにありて（リユミノジテ・エテルネツル）』

・パーシヴァル

スキル『騎士の矜持A』

対人宝具『誇り高き血統（アルバートⅡパーシヴァル）』

・関羽

スキル『仁王立ちA++』

対人々対軍宝具『青龍偃月刀（せいりゆうえんげつとう）』

・与一

スキル『絶対必中EX』

対軍宝具『滋籐（しげとう）の弓』

・ナポレオン

スキル『天性の指揮B』

対城宝具『私の辞書に不可能という文字は無い』

・グリム兄弟

スキル『夢見る心?』

対軍宝具『みんなに届ける物語』

・ユライ

スキル『気配遮断B』

脱出宝具『受け継ぎし盗賊団』

・エドワード

スキル『狂化D』

特攻宝具『甘美なる殺戮の世界』

・ラファエロ

スキル『天の啓示EX』

対国宝具『ヴィツラ・マダーマ』

・アダム

スキル『反転』

対樂園宝具『エデンの果实』

・オーデイン

バルトメロイ家当主

現魔導元帥

魔術？『無尽エーテル砲』

武器『神華槍（グングニル）』

・トール

封印指定対象者

アトラス院元院長

統一言語師（神代の意志疎通を再現）

武器『雷神の鉄槌（ミヨルニル）』

一話

「…素に銀と鉄 礎に石と契約の大公

降り立つ風には壁を 四方の門は閉じ 王冠より出で 王国に至る三叉路は循環せよ 閉じよ 閉じよ 閉じよ 閉じよ 閉じよ 繰り返すつどに五度 ただ満たされる刻を破却する

告げる 汝の身は我が下に 我が命運は汝の剣に 聖杯の寄るべに従い この意この理に従うならば応えよ 誓いを此処に 我は常世総ての善と成る者 我は常世総ての悪を敷く者

汝三大の言霊を纏う七天 抑止の輪より来たれ 天秤の守り手よ。」

ある島国の冬木の町、広い屋敷の薄暗い倉の中で一人の男の声が響く。

年の頃は20代前半頃だろうか、眉間の皺が無ければもつと若くも見える。男：衛宮切嗣は、召喚の儀を終えて一息吐く。

薄暗い倉の中に置かれたのは一つの箱に納められた英霊（サーヴァント）召喚の為に手に入れた媒介。切嗣が苦心して手にしたのは、聖杯の欠片。

無論、切嗣がこの度参加した【第4次聖杯戦争】の優勝商品である聖杯とは異なる。

聖杯の欠片が媒介……出来うる限り歴史を調べた所、思い付くのは、アーサー王伝説に置ける英雄達。

ガウエイン、ガラハット、トリスタン、あと……

カッ

そこで切嗣の思考が止む。聖杯の置かれた魔方陣が強い光を放ち、倉中が光に包まれた。目映い光に細めた光の中には、上背のある騎士だろう英霊が佇む。

次第に光が弱まり、目の前の英霊（サーヴァント）と切嗣（マスター）と視線が合わさる。英霊の一見冷たいとも言える唇の端が僅かに上がった。

「……サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。貴公が俺のマスターか？」

「……ああ。その通りだ。君は、ガウエイン……いや、ガラハットか？」

切嗣の問いに、セイバーの眉が寄り僅かに思案する様を見せ、直ぐに一人横に頭を振り不敵な笑みを浮かべる。

「貴公が我が名を名乗るに相応しいか、それを確かめてからだ。」

「……何だど？」

切嗣の顔に陰が帯びる。その胸中では、厄介なサーヴァントがあたってしまった、と後悔も起こるが彼の冷静な思考は直ぐに切り替わる。

「どう確かめるといふんだ？」

「…戦いの時の君の判断に委ねよう。それが不服なら、令呪でも何でも使えば良い。」

切嗣は気付いた。相手の呼び方が、貴公から君へと変わっている事を。距離を縮めて来たのか、それともマスターとして認めていないからか。

よし、良いだろう。

「…僕の目的は聖杯のみ。君はサーヴァントとして戦ってもらおう。それだけだ。」

「なるほど。」

探っていたセイバーの瞳が、一瞬人間味を帯びた気がした。それは、苛立ちか呆れか。

セイバーとマスターが出会った頃、衛宮 切嗣邸から遥かに離れた教会の屋根に腰かけた少女がそれを見つめていた。

月に輝く金色の髪を後ろで三つ編みにし、青い瞳で彼方の二人をただ見つめる。

「…やっぱり、セイバーと切嗣は仲が悪いんだ。」

どうしよつかなあ、と眩き屋根からヒラリと飛び降りる。その姿は、肌を差す寒風吹く冬木の町に溶けて行くのだった。

運命に導かれる様に、7人のマスターと7のサーヴァントが巡り会う。それは必然。

一つの陣営は、お互いの胸中を見せず探り会う。

一つの陣営は、熱き誓いを交わし、

一つの陣営は、真摯に目標を定め、

一つの陣営は、怯えと気高さを混じり、

一つの陣営は、優しい親愛を注ぎ、

一つの陣営は、狂った愛で満たし、

一つの陣営は、好奇心を沸き起こし。

新たな歯車が回りだした。